

## 北尾雪坑斎の絵本

肥田 皓三

大阪の絵師北尾雪坑斎（名は辰宣）は宝暦頃の人ですが、著作が多く特に子ども絵本を数多くのこしています。その中の一冊『扇子勤功誌絵抄』（あふきくんこうしえせう）は扇の功德を述べて目出たい語句をつらねています。肝腎の絵を入れず、文字だけの愛想のないことですが、短いものなので翻字してみます。

### 扇子勤功誌絵抄

北尾雪坑斎

扇の用、あげて数へかたし、先づ新玉の歳玉となり、手に持ちはては礼義を述べ、婚姻の祝儀をととのへ、一封の金銀を贈る台とも成るべし／伊勢の太夫殿の土産、お寺の入院に使われ、日当りには笠の替わりとなる、神に詣りては手に取り持ちて幣ともし、佛を拜する時には坐具とも成るべし／一の谷の合戦に熊谷直実扇を上げて敦盛を招き、八嶋の戦に平家の舟より紅の日出したる扇を立てて招くに、那須与市これを射て落し源平の目を覚せけり／鼓太鼓の稽古に用いられ、浄瑠璃には拍子とり、夏の暑さに風をまねき、蠅を追ひ、蚊を叩くべし／能狂言には

盃とし銚子となる、戸障子ともなる、筆に用ゆ、又は剣ともなるべし、望月にては獅子頭ともなる、茶弁当には火吹竹に使わる、尻に敷きて円座半畳ともなれり／色町をぞめくものは顔にあてて御簾の替わりとし、喧嘩に棒として叩き合う、ちよつと顔に覆うて屏風となり、品玉とりは種を隠すたよりとするなり／木遣音頭、物真似は必ず翳して口許をかくす幕とする、虚無僧は手のうちの施米を受ける盆とする、家の棟上げには三つ扇を飾るなり、その故は知らず／埃を払へば箒とも塵取りともなる、地紙を屏風、襖または張箱をも貼るべし、骨は素読の字突きとなり、灸箸となして養生長寿の頼りとなるなり／

昭和六十年に中野三敏氏と共編で出版した『近世子どもの絵本集・上方篇』（岩波書店）に収めた「桃太郎」はやはり北尾雪坑斎の作で、その内容は通行の桃太郎とは違う、濃厚なユーマアに富む上方らしい異色作品です。併せて見ていただきたいです。

（ひだ こうぞう／本学元教授）